

第16号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十四年十一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

夏の終わりに	骨弱亭 骨人	1
アビーロード	小野村 新	4
龍之介の皺は深い	高阪博一	11
二足のわらじ	明花	22
畑	大西 亥一郎	25
仙人掌 瓜生 八頼子		36
あこがれのカラオケ教室	水田 竜子	38
アクトス写真館		42
鏡と写真	高阪博一	43
おじぞうさま	大西 亥一郎	45
編集室から		51

夏の終わりに

骨弱亭 骨人

忌わしい夏の湿気もようやく退散し、朝の日射しが肌に心地よい。私の骨袋もどうやら活動を再開し始めたようである。

痩身故にこの年になるまで足腰には支障なくランニングを続けて来たが、昨年新たな刺激を求めて「マスターズ陸上」に登録した。以来私の練習場所も鴨川から、西京極のサブトラックに移り、七十歳を越えても100mをまだ14秒台で走れる超スーパー老人達と共に今までとは違ったランニングを楽しんでいる。

マスターズでは5歳刻みで競技クラスが別れ、今年の夏に65歳になったばかりの私は、8月の京都選手権の800mで運よく一位になることが出来た。その勢いにかけて9月21日からの「全日本マスターズ選手権」岡山大会に参加した。他人には「旅行気分楽しんでくるだけ」と言いながら、心の中ではあわよくば銅メダルでもと、妄想にとりつかれ、大会が近づくにつれ、私の心は、否、体調までも穏やかさを失いつつあった。

結果は、夏バテの体に妄想実現のプレッシャーが加わって全く普段の走りが出来ず、自己ベストには5秒以上遅れ、今季最低の記録で、メダルどころか念願の6位入賞も果たせずに終わった。やはり、体育会系の猛者ぞろいの「全日本」は私にとつて刺激が強すぎたようである。それにしてもいい年をして、たかがマスターズ大会でさえこのプレッシャーだから、オリンピックの舞台に立つアスリートのプレッシャーたるや如何ばかりのものか察しがつく。

何はともあれ、この一年間、この大会を目標に練習を重ねて来ただけに、わざわざ岡山まで来て己の力

を出し切れなかった自分が腹立たしく、実に情けなかった。その日の夕食会では、日本記録達成やメダル獲得の喜びで盛り上がる中、私は己のふがいなさを笑い飛ばしながらも心の中は悶々としていた。

翌日、私は仲間と別れ、独り傷心を抱いて四国遍路に旅立った。

車窓には私の心を解きほぐしてくれるかのように瀬戸内の海が明るく輝いていた。私はすっかり秋の空気に入れかわつた宇和島の「卯之町」に降り立った。国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、一度訪れたいと思っていた町である。

私はいつものようにカメラを片手に静かな町をさ迷い歩いた。休日にもかかわらず旅人はほとんど見かけない。路地を歩いていると、前からやって来る地元の人が、私に向かい親しげに手を上げて会釈する。その時私は不覚にも、自分の後ろにその人の知人がいたのだと思いつまみそのままやり過ごしてしまった。すると二度目に出会った老人もやはり私に向かつて会釈する、私は思わず後ろをふり返ったが私の他に誰もいない、初めて自分の立場に気づいた私はあわててあいさつを返した。その後も自転車に乗った中学生がすれ違いざまにやはりあいさつを交わしてくれた。たった三度のあいさつが旅人の心を暖かくしてくれた。

味噌の香ばしい香りに誘われて路地を進むと、地元の老舗であるか一軒の味噌や醤油を商う由緒ありげな店に出た。店の筋向かいにこれまた古めかしく風情ある家屋が連なり、その一軒の竹格子に朝顔が見事に咲きそろっている。思わず店の軒を借りてカメラを構えていると、店の中から女主人が声をかけて来た。聞けば、今は廃屋となった向かいの家をこの店が管理し、趣味で朝顔を植えていると言う。国の「重伝地区」に指定されているが、訪れる観光客もほとんどいないこの通りで、カメラを向けてくれたことがうれしかったのであろう。

年中観光客の絶えることのない京都では、若者による古い町屋の再生が進んでいるが、過疎の地にあつてはそれもなかなか難しい様である。しかし、土産物屋と観光客であふれる京都の町から訪れた私にとつては、<sup>ひとけ</sup>人気のないこの町のたたずまいが何とも言えず心地よく本当に心を癒してくれる。旅人の身勝手かもしれないが、何とかこのまま観光地化されずにいつまでも手づくりの温もりが残った町であつてほしいと願うばかりである。

しばし逍遙の後、この町を去る頃には私はもうすっかりいつもの自分らしさを取りもどしていた。



アピーロード

小野村 新

その夜も、新一はヘッド・ホーンを耳に当ててビートルズを聴いていた。ヘッド・ホーンをつけると、外界の音から遮断される。夜の孤独な部屋でサウンドと一体になれる。春休みで他の部屋の友人は皆故郷に帰省していた。こんな日には普段よりじつくりとビートルズを聴くことができた。彼は、メンバーの息づかいひとつ聞き逃さないよう、ヘッド・ホーンのパッドの部分を両手で押さえ、細心の注意を払って聴いた。

聴き始めて小一時間ほどした頃、耳の中に鳴り響くサウンドに身を任せていた新一はある胸騒ぎを覚え、我に返った。激しい音響の中に不調音を感じたからである。あわててヘッド・ホーンを外した。ドアを激しい勢いで叩いている者がいる。鍵を開ける前に来訪者の用件は判った。台所の流しからあふれた出た水が、じやあじやあと流れ落ちている。すぐに水道を止めてドアを開けた。階下に住む浦川道子さんが怒りの表情を顔わにして立っていた。

「泥水が押し入れに流れ込んで、布団が濡れてしまっているんですよ。下に来てどんな状況かみてくださーい！」

激しい剣幕に圧倒されて、新一は平謝りに謝った。

「台所を片付けてすぐに伺いますから」

「まったくもう、こんな真夜中にー。いったい何をしたのかしら。」

捨てぜりふを残して道子さんは引き返して行つた。冷や汗で濡れた額をシャツの袖でぬぐいながら、まだ

水がその継ぎ合わせの隙間から階下に落ちている気配の木の床を、乾いた雑巾です早く拭いた。詰まっていたじやがいもや玉葱や人参の皮をつまみ出すと、流しいっぱいに溜まっていた汚れた水は、渦を巻きながら排水口に吸い込まれて行き、黒い泥が出口の周りを覆うようにたまつた。

急いで階下に降りた。道子さんに案内されて寝室に入った。押し入れの壁を伝わって幾筋もの黒い水が流れ落ちていた。天井からもぼつぼつと大きな水滴が落ちている。布団はすべて畳の上に出されている。

「見てちょうだい。このありさまよ」

道子さんは布団の濡れて黒く汚れた部分を指で示しながら、新一のやらかした失敗がいかに迷惑な行為であるかということ、ことさらに強調しようとした。

「ほんとうにすいませんでした。償いは何らかの形でさせてもらいますから」

「そんなもの、要らないわよ。大体ねえ、……」

その時、開け放した玄関から鼻歌を歌いながら道子さんの夫の哲雄さんが入ってきた。仕事の帰りにどこかで飲んできたらしい。

「あれ、山中君じゃないか。いつたい何があつたんだい、こんな時間に」

酔って呂律が回らない哲雄さんは、おぼつかない足取りで寝室までやって来た。奥さんの説明をうなずきながら聞いていたがそれを途中で制して、

「よくく分かつた。失敗はだれにでもあるもんだ。そんなにくよくよするなよ。後は俺たちで片づけるから、早く上がって寝ろよ」

笑いながら大きな声でそう言うと、おどけながら新一の背中を玄関に向かって押しだすようにした。

新一は哲雄さんと一度だけ飲んだことがある。一ヶ月程まえ、駅前の食堂で夕食をとっていると、哲雄さんが入って来たのである。すでに酔っているらしく、気さくに話しかけながら、新一と同じテーブルに腰を下ろした。勧められるままに新一も酒を飲んだ。酔いが回るにつれて、哲雄さんはぐちをこぼしはじめた。

「子どもがいない生活は張り合いがないねえ」

どう答えていいか分からなかった新一は、適当にあいづちを打って哲雄さんの話を聞いていた。

「結婚してもう七年なんだよ。来年でお互い三十五歳になるというのに、家内が子どもを作らない主義でね。困ったもんだよ。それどころか、最近ではセックスすらなくなってしまうてね」

「それはよくないですね。でも、どうして奥さんは子どもを作らない主義なんですか？」

「こんな殺伐とした世の中では、生まれてきた子どもがかわいそうなんだとさ。でもそれは口実で、どうも俺の子どもを産みたくないらしい。俺の粗野な性格が気に入らないらしいんだ。新婚の頃はけっこう仲良くやっていたんだけどねえ。二人で人生を楽しもうってわけで、日曜日にはいつもドライブに出かけたもんだよ。あいつは音楽が好きでねえ。音楽なんか全然解らない俺を、無理矢理クラシックのコンサート会場まで引っぱり張って行ったものさ。居眠りしながら聞いている俺の横で、あいつはけっこう幸せそうだった」

部屋に戻ると、十二時を過ぎていた。先ほど償いはするといったものの、具体的にどのような償えばよいのか分からなかった。継続的に勤めていたレストランのボーイのアルバイトを辞めて二週間が過ぎていたので、金もなかった。春休みに入る前に支給されていた二ヶ月分の奨学金のほとんどをパチンコにつき込んだこと

を後悔した。

経済的な窮境を脱する時、新一はいつも鉄工所で日雇いのアルバイトをした。今度もその方途しか思い当たらなかつた。この仕事は、同じクラスの伊藤という学生から紹介してもらつた。彼は新一と同じく、母子家庭という不遇な境遇の学生だつた。新一や伊藤のような仕送りのほとんどのない苦学生にとつて、仕事を終えたその日に三千八百五十円という賃金を手にすることができるのは、望外の喜びであつた。

翌日、新一は鉄工所へ行つた。夜の八時半から仕事が始まつた。床に積み上げられている棒状の鋼鉄を、ゆつくり動いている金具にぶら下げていく。鋼鉄自体はさほど重い物ではなかつた。しかし、この種の単調な作業を連続して一時間もやると、しまいには苦しくてうなり声が出る。時間が増すごとに体力が弱まり、だんだんと鋼鉄が重く感じられてくるからだ。ウーン……といううなり声を発しながら、鋼鉄を金具に掛けていく。金具は一定の速度で遠慮無しに回つてくる。作業の工程から一つの金具だけに空きをつくることはできない。一時間ごとに訪れる十五分間の休憩がなんとかその作業を持続させてくれた。仕事は早朝の五時に終わった。粉塵と埃で黒くなつた顔を洗つた後で給料を受け取つた。

新一はこのアルバイトに二日連続で通つた。それは新一にとつて初めての体験だつた。体の節々が痛んだが、マラソンを走り抜いたような爽快感があつた。

新一は、七千七百円のお金で、高級な和菓子を買つた。次にレコード店に行つた。音楽好きの道子さんのためにクラシックのレコードを買おうと思つたからである。しかし、何のレコードを買つてよいか皆目見当がつかなかつた。たとえクラシックのレコードを買つたとしても、道子さんはそのレコードを持つているかもしれない。結局、新一はビートルズの「アビーロード」を買つた。このレコードは最近発売されたもので、彼が今最

も心酔しているものである。このレコードならクラシック音楽好きの道子さんが気に入ってくれそうな気がしたのである。「アビロード」を買った後、新一は苦笑した。あの失敗をやらかした夜もこのレコードを聴いていた時だったからである。

新一は勇気を奮い起こして玄関のブザーを鳴らした。道子さんに三日前の件を詫びて、和菓子とレコードと、クリーニング代として三千円を渡した。道子さんは無言で新一のさし出すものを受け取った。

その夜、哲雄さんが新一の部屋にやって来た。

「山中君、菓子とレコードはいたただくけれど、お金はいたただくわけにはいかないよ」

強引に裸のままのお札を握らせようとする哲雄さんの手を、それ以上の気迫で新一は制した。

それから二ヶ月程経った日曜日、いつもの食堂で夕食をとっていた新一のテーブルに、アベックが近づいてきた。食事に夢中になっていた新一は、二人の意味ありげな笑い声で顔を上げた。そこには哲雄さんと道子さんが立っていた。買物の帰りらしい。道子さんはSデパートの真っ赤な紙袋を提げている。長身であることは分かっていたが、今日はますます背が高く感じられた。

「ガラス戸越しに君の姿がみえてね。一度伺って、お礼を言わなければと考えていたところだったんだ」

「いったい何のことですか」不審そうな顔をした新一に向かって、道子さんが答えた。

「あの時はごめんなさい。きついことばかり言ってしまったて……。職場でいやなことばかり続いていた時だったの。主人ともうまくいってなかったし」

新一の脳裏に、あの時の道子さんの怒りの表情がまざまざと蘇った。

「道子は『アビロード』に感動したらいいんだよ。ビートルズなんてやんちゃな連中ががなり立てている騒

音にすぎない、なんて言っていたのにね」

「そうですか。うれしいなあ、それは」

新一は本心から喜んだ。ビートルズを誉められることが何よりも嬉しかったのだ。

「ビートルズの音楽って、本当に優しいのね。私、アビーロードのB面を、ある物語を描きながら聴いたのよ。B面って、トータル・ナンバーになつてるでしょ」

奥さんの言うことを新一はよく理解できた。切れ目なく続くメロディーの流れが、一編のストーリーを描かせたのであろう。

「どんな物語ですか？」と、訊いた時、哲雄さんが照れながら答えた。

「愛と希望に溢れた、夫婦の仲直り物語らしいよ」

そういえば、最近階下から道子さんの楽しそうな笑い声が聞こえてきたり、アパートの前で交わす挨拶にも優しい笑顔がこぼれていたことを新一は不思議に思っていたのだ。まさか、ビートルズがその原因だったとは、思いもよらないことだった。

新一は夫婦と連れだつてアパートまで帰った。別れ際に、思い切つて言った。

「ぼくが大学を卒業するまでに、赤ちゃんの顔を見せてくださいよ。」

新一は、殺風景な部屋の壁に飾られたビートルズのポर्टレートをしみじみと眺めた。ビートルズの微笑がこんなにやさしく見えたことはなかった。

新一は六十二歳になった。三人の子どもも独立して家を離れ、妻と二人暮らしである。勤めていた建築

会社を退職し、再雇用で働いている。今日は土曜日なので、朝食をとりながら妻とロンドンオリンピックの開会式を見ている。参加国の行進が終わり、オリンピック旗が掲げられ、二〇四の聖火がひとつになって、大きく燃え上がった。何発もの花火が打ち上げられた。その後を訪れた静寂を破るように、スタジアムが大歓声に包まれた。ポールマッカートニーが登場したのだ。ポールはピアノを弾きながら「ヘイ・ジュード」を歌った。個人的ないきさつを秘めたこの歌が、いまや普遍的なメッセージソングとして鳴り響いている。

ビートルズがすべてだった二十歳の頃が蘇る。髪の毛を肩まで垂らすこと、それが自由だと思っていた。公序良俗からの自由を満喫できた、あの頃だけが青春だったと新一は思う。突然、亡くなった哲雄さんの顔が浮かんだ。「アビーロード」が道子さんの仲をとり戻させてから六ヶ月後に、哲雄さんは肝臓ガンで亡くなってしまったのだ。三十六歳という若さで――。

ポールがピアノを離れ、壇上に立った。彼の指揮で、何万人ものアカペラの合唱が始まった。

その声は、こだまとなってロンドンの夜空に吸い込まれていった。



龍之介の皺は深い

高阪博一

もう一度、大学に行くとしたら、どの学部を選ぶだろう。理学・工学系？あり得ない話だ。合理的な思考世界、原因と結果が結びつく因果関係の世界は、窮屈過ぎてどうも性に合わない。やはり、文系の学部だろう。経済学部？会社にいる頃よく給料計算を間違えた。これはない。法学部？あの法律の条文は、どう考えても、色気がない。その条文を覚えるなんて、これは出来そうもない。そうなる、答えは自ずと決まってくる。そう、また、文学部に入るだろう。

それならどんな学科を選ぶ？哲学科か。二度も行くところではない。歴史学科か。あの虫が食った古文書を読むのは、多少気持ちが悪い。外国文学科か。語尾がどうしても下がってしまう大阪弁的英語では、仲間が面食らうだろうし、海外旅行をしたこともない島国根性の者が、外国文学など思いも寄らない。そうなる、決まったようなものだ。日本文学科しかない。

猛烈な牽強付会だということとは、よく分かっている。三年も源氏物語を読んでいると、頭の中は紫一色、日文以外は考えられなくなってしまうている。源氏を遣りたいのは、やまやまのだが、時間がかかりそうだ。五十四帖は如何にしても長い。違うものをするか。現代文学はちよつと軽い。研究とまではいかないような気がする。評価が定まるのに、もう少し時間が掛かりそうだ。

それなら、近代文学だ。誰をする。決まっている。芥川龍之介だ。やつと、龍之介の名前が出てきた。好きなものは仕方がない。どこまで行つても、好きは好きなのだ。理屈ではない。いちいち条件を考えながら、人

を好きにはならない。見た瞬間に恋に陥る。そう、読んだ瞬間に恋に陥ったようなものだ。言っておくが、決して容姿ではない。好みもあるが、顔で選ぶなら志賀直哉だろう。兎に角、あの躍動し畳み掛けるような簡潔で研ぎ澄まされた叙情に満ちた文体に、恋をしたのだ。

それでは龍之介の何を遣る。ここで、はたと困ってしまった。龍之介にはいろいろなジャンルがある。一つには日本の古典等に題材を取ったもの、「芋粥」ほかだ。一つには私小説的なもの、「大道寺信輔の半生」ほかだ。一つには鋭い警句集の類い、「侏儒の言葉」だ。一つには童話の類い、「蜘蛛の糸」ほかだ。そして、もう一つにはキリスト教に関するもの、「奉教人の死」ほかだ。

小学生の時分、わたしは塾に通っていた。その塾の先生はローマ・カトリックの信者だった。勉強は適当で、神様の話などをよく聞いた。信者にはならなかつたが（なれなかつた？）、「三つ子の魂百まで」と言おうか、わたしの意識の内にしつかりと、キリスト教が根を張って、考えや行動に影響を与えている。ここまで書けば決まったようなものだ。キリスト教に関する諸作の研究だろう。

歌劇が始まる前の序奏が、長くなり過ぎて、欠伸が出るようなものだ。退屈な文章にお付合い願ひ恐縮千万、同人諸氏、お許し願ひたい。そろそろ、本題に取り掛かると、龍之介のキリスト教に関する著作について、評論を書きたいのだ。卒論風に言えば、「芥川龍之介の一考察：その基督教受容の諸問題」とでもなるうか。

と言つても、書きたいと書けるとは別のことだ。困ったことに、「評論」などというものを書くだけの学識がない。好きで読んでいる者に出来るとすれば、「読書感想文」程度だ。「評論」は国文に入学して研究するまで、取つておこう！？

龍之介は一八九二年(明治二五年)に生まれ、一九二七年(昭和二年)三五歳で、服毒自殺している、「何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である」という遺書を残して。この間に小説を一五七篇書いた。基準がどうなのか分からないが、短篇が圧倒的に多い。澄江堂(チョウコウドウ)と号して書いている時もある。俳句もなかなかのもののようにだ。師の漱石も俳句をよくしたと言う。どちらが、上手かつたのだろうか。興味深いのが、俳句云々はこの稿に関係がない。脱線は禁物だ。

これを書くために、九月の十日頃から、対象作品の幾つかを読み始めた。キリスト教に関する作品は多い。そこで、無作為に自分で決めて、「尾形了齋覚え書」(一九一七年：大正六年)から始めて、「続西方の人」(一九二七年：昭和二年)までの十五作品を、二十日に読み終わった。

このうちには、以前読んだものもあれば、そうでないものもある。その一つ一つについて、「読書感想文」を書く時間的な余裕は、今となつてはない。刻一刻と締切時間が迫っている。時間との競争だが、わたしは足が遅い。息も切れる。

書いている今の時間は、九月二一日・午前十時四十分、締切まで十日を切っている。焦りまくって、小説は読まずに後書きを見て、適当に書いていた夏休みの宿題を思い出して、笑ってしまった。五十年以上経っても、同じようなことをしている。「進歩がないなあ」溜息混じりに、パソコンのキーボードを眺めた。

眺めていても、前に進まない。書かねばならない。この「ねばならない」が原動力だ。何冊かに絞れば、書ける。さて、どれと、どれにするかだ。有名どころでは、「奉教人の死」(一九一八年：大正七年)だろう。その他は、読んでわたしがおもしろいと感じたもの、「神々の微笑」(一九二二年：大正十一年)と「おぎん」(同)の計三冊にしようと思つた。

先ずは、「奉教人の死」だ。感想文の常道は、梗概を書くことから始まると思つてゐる。異論の或る方も多々おられようが、時間がないので、ご勘弁を。(梗概は、三篇共、『三好行雄編・芥川龍之介必携(学燈社)』から、引用しました。)

【梗概】長崎の教会で養育された(ろれんぞ)は天童の生まれ変わりのような少年だった。或る傘張りの娘が懐妊し、その相手だとして、教会から追放され、乞食にまで身をおとす。一年後、長崎に大火があり、娘の赤子が火の中に取り残される。誰も助けることが出来ない。(ろれんぞ)が姿を現し、赤子を救い出すが、彼自身は息もたえだえになる。そこへ娘の懺悔があり、彼の無実が明らかにされると同時に、(清らかな二つの乳房)が現れ、(ろれんぞ)の無垢が証明される。

この小説は、エピソード【※】及び一と二の二部で書かれている。一は物語であつて、二では「予」がこの出典(自分が所蔵している「長崎耶穌会出版の『れげんだ・おうれあ』)を説明するという構成になつてゐる。

文体は、冒頭の一文を示すと『去んぬる頃、日本長崎の「さんたるちや」と申す「えけれしや」(寺院)に、「ろれんぞ」と申すこの国の少年がござつた』で、江戸期風のものだ。これが四百字詰め原稿用紙で概ね二六枚程度に書かれている。典型的な短篇だろう。

この当時の作家の文章には漢字が多い。漢文の素養は、作家の条件の一つであつたろう。だから、簡潔で、リズム感のある文章を書く人が多い。龍之介も時代は大正だが、そんな作家の一人だろう。それに、あの理知が加わると、時には難解で、読み難いものになる場合がある。この作品は、それ程、難解なものではない。筋立てが単純で、ドラマチックで、分かり易い。だが、漢和辞典と国語辞典が必携であることは、言うまでもない。

当用漢字という制度のない時代なので、当然のことだが、読めない、意味が分からないという語句が出てくる。それはこの作品に限ったことではない。そこで、ふと思うことがある。高校から大学時分に、こういう擬古文調のものを、もつと気合を入れて読んでいけば、語彙力が増していただろうにと。今読んでも、覚える以上に忘れてしまうので、語彙力が増したり、文章力が向上したりは、望めそうにない。何となく悲しい。

内容を一言で表現すれば、アガペー「※」的な愛の物語だ。己を貶めた女の赤子を火の中から救い出し、己自身は命を落す。その命を落す一瞬の為に、生きてきたような主人公の一生。《なべて人の世の尊さは、何ものにも換え難い、刹那の感動に極るものぢや》との一文が（一）部のほぼ最後に書かれている。

基督教（これからは、「キリスト教」を漢字で書く。その方が、びつたり嵌る気がする）は、アガペー的愛を尊ぶ。基督の十字架上の死は、人の原罪を贖うためのものであつて、この愛そのものと言える。エゴを捨てた自己犠牲、その意味では、教科書通りの物語だ。

天邪鬼のわたしとしては、多少納得しかねる点がある。へろれんぞ〜が女であると最後に分かる筋立てという点だ。何年か一緒に暮らしていて、男か女か分からぬものだろうか。大文豪にケチをつける気は更々ないが、どうも、最後がストーンと落ちない気がしてならない。こんな枝葉末節に拘るのは、わたしの読解力不足なのだろう。

次は、「神々の微笑」だ。三作品の中では、この作品が宗教的な難問を、問うているような気がしてならない。先ずあらましを書く。

【梗概】オルガンテイノ神父は、なぜか彼を憂鬱にする日本から去りたいと思つている。日本には山にも森にも町にも何か不思議な力が潜んでおり、日本人は邪宗に惑溺しているからである。ある日

（この国の霊の一人）という老人が突然現れて、神父に、自分達の力は（造り変える力）だから氣をつける、と言ひ残して消えていつた。（泥烏須（デウス）が勝つか、大日・貴（オオヒルメムチ）が勝つか）は容易に断定できない問題である

文体は擬古文調や古文書を真似たようなものではなく、普通の口語体の文章だ。内容は別にして、割りあい読み易い。これも短篇で、原稿用紙三十枚程度の作品だ。例によつて、漢字は頗る多い。（漢字に全く自信のないわたしまで、「非常に多い」と書けば良いところを、こんな書き方をしてしまう。わたしは何と影響され易い人なのだろう）

要点は、八百万の神を信仰する日本という国に、唯一神教の基督教が根付くか否かということだろう。龍之介の立場は根付かないとう立場のように思う。この自然の中に、「かみ」が満ち溢れ、そのお陰を蒙つて生きている我々に、「ただ一つのわれのみを崇めよ。他のものは棄て去れ」と迫られても、出来る相談ではない。

それなら、どう折り合ひを付けるのか。その神を造り変えるのだ。物語の終盤で、《我我の力と云ふのは、破壊する力ではありません。作り変える力なのです》と「老人」に言わしている。作中にもあるが、中国から入った漢字等の文化も、日本流に直し、仏教も日本の「かみ」に習合にさせ、日本流に消化してしまう。基督教も、このようにしてしまうと、本来とは似ても似つかないものに、作り変えられてしまう。さて、唯一神教はそれを許すだろうか。オルガンテイノの憂鬱もその辺に、あつたような氣がする。（基督教も、初期の布教段階では現地の習俗を容認する部分もある。欧州各地では土着信仰が基督教の衣を纏っていることも多い）

龍之介は、基督教をどう捉えていたのだろうか。「西方の人」という作品の中で、『わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にクリスト教を―殊にカトリック教を愛していた』と書いている。「信じていた」ではないのだ。基督教は作家的教養の対象であつて、信仰の対象ではない。彼の宗教としての基督教への態度が、懐疑的な感じがしてならないのは、このためかもしれない。しかし、龍之介の死の枕辺には、聖書が置いてあつたという。死の間際まで、読んでいたのだろうか。救いを求めていたのだろうか、いつたい何からの救いを。

オルガンテイノはほの暗くなつた庭を歩いている。吐息を漏らしつつ、主よ守り給え、と独白する。その時、夕闇に咲く枝垂桜が不気味に見える。『不気味に、と云うよりも寧ろこの桜が、何故か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだ』この箇所が、主人公の心の内を、現しているように思えてならない。

次に最後の「おぎん」に移る。この作品が、掲げた三つの内では、わたしの最も好きなものだ。先ず、今まで通り、あらましを書くこととする。

【梗概】おぎんとその養父母は、ある年の降誕祭に捕えられ、一カ月拷問を受けたあと、焚刑に処せられるべく刑場に引き出される。いざ火がつけられようとする時に、突然おぎんはへおん教を捨ててゝと言いだした。養父母の忠告に対して、おぎん言うのには、実父母が仏教徒として地獄に墮ちている以上は、自分だけ天国へ行くわけにはいかないから、棄教するのだということだつた。養父母もついに棄教したので、悪魔は大喜びだつたという。

この作品も原稿用紙十七枚程度の短篇で、掲げた三つの内で、最も短いものだ。「孝」によつて棄教する信徒の話だ。いつものように、起承転結が簡潔に纏められ、口語体の文章で読み易いものだ。

物語は主人公おぎんを含めた親子の棄教の話だ。厳しい拷問が続く。信じる者にとつて、出来るのは

祈りのみだ。暗い牢の中で、ひたすら祈る。神は沈黙していても、信じている限り、心の中にい給うことは実感出来ているはずだ。それが棄教するのだ。

おぎんの健気さが際立つ。地獄にいる実父母を置いて、自分だけが天国に行けないと言い出して棄教する。それを見ていた養母は、夫のお供のために、信心していたと言い、続けて棄教する。残る養父も、この二人に釣られるように棄教してしまう。

この養父が棄教する場面の本文をちよつと長いが、引用すると、《おぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、ぢつと彼を見守っている。この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。》と書かれている。

あのおぎんでさえ、原罪の張本人エヴァの心も宿しているという、シニカルな言い回しを行っている。おぎんの一途で純粋な孝行心が、棄教という信徒最大の不幸を、この一家にもたらす。この「転び」は基督教という宗教においては罪かもしれないが、この国にあつて、これが罪と問えるものなのだろうか。問えないのではないかと、という龍之介特有の逆説的な話なのだと思う。

それでは、西洋での殉教とは、どういうものだったのだろうか。不勉強でここで云々するほどの知識を、わたしは持ち合わせていない。少なくとも、言えるのは、西洋での信仰は、神対個の関係ではないかということだ。

「己自身が、信じるか否か」のどちらかの決断だ。だから、殉教の場においても、揺れて棄教があるかもしれないが、絆（ホダ）されることはないように思う。日本の場合には共生的と言おうか、己を貫けず、絆される「※」時があるように思う。別の言い方をすれば、「家族の絆」ということになるのだろうか。

おぎんの言葉なら、《お父様！いんへるのへ参りましょう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、みんな悪魔にさらわれましょう。》ということになるのだが、逆に考えると、救われるときも「皆一緒に」とてもなるのだろうか。

これで、三作品の「読書感想文」は書いた。今、九月二五日の午前十一時五十分だ。まだ、締切には間に合う時間だ。もう少しだけ、同人諸氏、お付合い願いたい。龍之介は基督教の何に惹かれたのだろう。これが解ければ、もう「卒論」が書けたようなものだ。さて、どうだろう？と考えてみた。

龍之介も人としてのいろいろな苦悩を背負っていた。実母の発狂、養子先の期待、病気による健康の衰え、不倫、義弟の自殺と経済的負担、創作に伴う苦闘などが、精神的な不安や苦悩に、繋がっていったと思われる。救いは何だったのだろう。龍之介は聖書をよく読んだという。それも、「新約」、特に、「福音書」であつたようだ。

「福音書」はご存知のように、四つある。基本的には基督の伝記を書いたものだ。どの辺りを、重要視したのだろうか。多分、「神の子」としての基督ではなく、「人の子」としての基督だろう。山上に立ち、人々に逆説に充ちた教えとく基督、人に最も蔑まされる職業の女を愛した基督、死の間際、十字架上で、エリ・エリ・レマ・サバクタニ（わが神、わが神、なんぞわれを見棄てたまいし）と叫んで息絶える龍之介自身の基督像を、常に頭の中に描いていたのではなからうか。

基督は基督教を知らない。基督の死後、彼を神に人々は仕上げたのだ。その意味で、教会には、神としての基督はいても、人としての基督はいないのだ。ただ、いるのは聖書の中だけかもしれない。そこには、問いかけのみに沈黙することなく、優しく応える基督がいるのだ。龍之介の死の床で、彼の呼びかけに、基督は何と

応えたのだろうか。

久しぶりに、龍之介の作品を読んだ。彼との出会いは、かれこれ、五十年以上前のことだ。中学二年の授業時、国語の女性教師が、脱線して、話し出した「好色」の梗概を聞いたことから始まる。高校時代には、「鼻」が現代国語に掲載されていた。これを書くに際して、何かと参考書も読んでみた。その中に、「漱石や芥川が、教科書から消えつつある」という一文があった。

確かに、ほぼ百年前の著作だ。今使わぬ言葉も多々ある。WORDを打っていると、間違っていたり、不適切なところに、赤いアンダーラインが入る。龍之介の原文を引用すると、何箇所かこの線が入ってしまう。「この無礼者め！」とWORDに向つて怒鳴ってみても、詮無いことだ。龍之介ファンとしては、皺がますます深くなるばかりだ。

了

#### 〔編集部註〕

エピソード：巻頭や章初めに付す題辭、引用句のこと。たとえばスタンダールの『赤と黒』には1章ごとにたいへん凝ったエピソードが付されている。「小説、それは街路にそつて持ちあるく一つの鏡である」などは特に傑作として知られているよう。日本ではあまり見かけないが、西洋趣味で用いられるケースがある。たとえば堀辰雄の「風立ちぬ」に見られる、「風立ちぬ、いざ生きまゆも」などは典型であろう。太宰治は「二十世紀旗手」で（生れて、すみません。）という日本人の恥の文化を象徴する名文句を残した。：「はてなキーワード」

アガペー…「無条件愛」のこと。「エロス」とは対極的に用いられる。…「はてなキーワード」  
絆される…束縛される。からみつかれる。特に、人情にひかれて心や行動が束縛される。…「広  
辞苑第6版」



二足のわらじ

明花

節子編

「なんや、節子、わらじ編むの覚えたんか？」

日焼けした茶色い節くれだった手でわらを叩きながらじいさんが声をかけた。

「うん」

節子は七歳。農作業の合間、雨の日には納屋でじいさんがわらじを編んでいるのを飽かずに眺めていた。

「節子は女の子やから、紅い布もろてこい。紅い鼻緒を上げてやるから」

「紅い布、持つてない」

次の雨の日、納屋を覗くと赤い鼻緒が用意されていた。節子はその時覚えたわらじの編み方を忘れることはない。

今はわらじではないけれど、布でつくる室内履きのぞうりをつくる。人にも教える。でも鼻緒だけはその

布に似合うものを節子が用意する。あの無愛想なじいさんが紅い鼻緒を用意してくれたように。

### 朋子編

おかしいほどに満面の笑みの写真が一枚。三歳の朋子と二歳年上の幼な馴染みのこうちゃんだ。浴衣をきて菅笠を背負つて、手を繋いで。モノトーンの写真は時代を物語る。はちきれそうなほっぺの盛り上がり祭りの高揚感を映し出している。

その時に履いているのが父の編んだわらじだ。父は手先の器用な人だった。子どもものに覚えたわらじを自分の幼い娘に編んで履かせていたのだ。その小さなサイズの出来栄えに近所の人が感心したそうだ。祭り時分になると、酒を飲みつつ問わず語りを始める父。わらじを編める人など昭和ひと桁でもそう多くはないだろう。

二〇一二年夏。

節子は七十五歳。朋子は五十歳。  
節子が朋子に布ぞうりの編み方を伝授する。  
それぞれの小さな思い出がシンクロする。何かがひとつに重なった小さな瞬間。  
時を超える。



画像は「わらじぐみ」HPより

畑

大西亥一郎

退職して、市民農園に畑を借りた。

神戸市で生まれて育ち、32歳で結婚して、当時勤めていた神戸市に隣接する明石市にマンションを買い住み着いた。祖父の代から神戸市の住民で、田んぼや畑には全く縁がない。第一、広い世界に寸土たりと言えども自分の土地がない。その意味では根無し草である。祖父の出身地に行けば遙かに遠い血縁者と墓はあるかも知れない。しかし祖父そのものが日露戦争に従軍したという古い話だし、祖父も父も亡くなってしまえば、遠い親類は赤の他人以上に関係がない。

若い頃から畑や田んぼの苦勞も知らず、汗水垂らして土や虫と格闘したこともない。だからと言うべきか、「土」に対する憧れ、執着がある。もう一つ、お坊さんに対するあこがれがある。これは、江戸時代以降、がんじがらめになった檀家制度から離れて、都市難民になったので、知らないことに対する興味かも知れない。

サラリーマン生活から解放されてみると、あふれるほど時間がある。先ずは定番通り妻と海外旅行に出かけた。ナイアガラ・ニューヨーク・万里の長城・香港・グアム・トルコ・韓国・イタリアとドイツ・スイス・フランスの三国周遊と駆け足で回ると、憑き物が落ちた。「イギリスと台湾に行つてみたいなあ」と考えないこともないが貯金も乏しくなる。

書き物もたくさんしたい。童話も小説も随筆も手当たり次第である。が、それも四六時中というわけに

もいかない。それで、畑を借りた。10坪ほどだが、楽しかった。

「水をやらねば」

「薬は撒きたくない」

「連作障害を避けるには」

「にしゅうやほしテントウムシは害虫だ」

「チヨウチヨは花粉を運ぶが、たまごは青虫、害虫になる」

「耕耘機が欲しいが、それほどの広さでもないし、保管に困る」

「なに、秋なすはこうしてつくるのか」

「ミニトマトは手入れが大変だが良く出来る。なるほどスーパーで買うと高いのは手間がかかるからか」

「サツマイモは連作障害もないし、天水だけで育つのか。飢饉の時の食べ物だわい」

「はあジャガイモは年2回もとれて、栽培しやすい。ヨーロッパで主食の訳だ」

「なるほど現在では稲作は機械化で簡単、畑作の方が大変か」

とまあ、ホームセンターを往来し、本を買い込み、隣の畑の方にお教えいただき、妻と三年続いた。

リタイア後の畑はこれも定番だが、続く人とすぐ諦める人がいる。パソコンと同じである。性に合うかあわないか、好きか嫌いか。大体嫌いなものは当たり前で「ケツを割る」のだ。好きなことは続く、もちろん家族を養うための仕事などは、好きでなくても続けねばならないから、仕事が性に合わないと人生が苦行そのものになる。

三年したら市民農園はあけ渡さないといけない。くじ引きで他の区画になる。理由を想像するに、申込

者全員に公平に当たるといふ趣旨からだろう。それに、当たった場所によつては、日陰であつたり、水源から遠かつたりと、同じ代金なのに格差が出来る。だがやり始めてみるとこの制度は悲惨である。3年間せつせと堆肥を入れ耕し、ふかふかにした土地を明け渡して、悪くすると雑草地が当たることになるのだ。それで、市民農園は諦めて、自宅から歩いて12分ほどのところにある知人の空き地を借りた。そこは線路際にあつて、知人の農地から飛び地のようになっていて三角形の土地だ。実質20坪しかない。それでも前の市民農園の倍ある。

片隅に名前不明の大きな木があつて、この葉が凄く。夏から秋にかけては畑の半分が日陰になるし、途中までこの木の根が伸びている。だから今まで放置されていたらしい。とりあえず妻と雑草を取り除き、ひと月ほどかかつて土おこしをした。

前の市民農園は、用水路までバケツで水をくみに行った。ここは畑の横が用水路だが、水を流すには農業組合員が電動ポンプを動かさねばならない。私は資格がないので、水が流れているときをお願いして、畑の横に置いた古い大きなポリ製水桶5つに水をひしやくでくみ上げる。

水が切れるときがあると、臨時に自宅から10リットルのポリ容器に水道水を入れて運ぶ。それが常態になつた。

それから5年になる。

妻が途中から日焼けしてお肌に悪いとかで畑に来なくなつた。私はバイクで往復する。夏の朝は5時半には畑に立つ。お隣のAさんは一反、つまり300坪ほどの畑を一人で耕しておられる。概算して30メートル四方ほどを耕しておられると言うことになる。今年90歳になられるがお元氣である。私の父が生き

ておれば同い年だ。

「おはようございます」

「おっ」

で、挨拶して、時たま話をお聞きする。多分大正12年のお生まれだ。両足の付け根にボルトが入っていると言うが、いやなかなか90歳には見えない。中国に戦争に行かれていたが、直接戦われることなくラッキ―だったと言われる。お兄様は、フィリピン戦線でなくなられた。この秋には靖国神社に参られるという。南方戦線は、補給路を断たれて日本兵の多くが餓死した。

「な…、作物が出来るのが嬉しい。それより何より、朝こうしてこられることが健康で、素晴らしい」  
「畑に来るとすることがいくらでもある。しばらく晴れが続くなあ」

私は神妙に拝聴する。Aさんからすると65歳の私は息子と同じ、若造なのである。

中国語を学ばれて毎年中国に行かれるが、身体の衰えもあり、今年は断念されているそうだ。

「今日は何をどこに植えた。何月何日に何の芽が出たとノートする」

「鶏糞は牛糞に比べてきついから、作物が大きくなってから与えなあかん」

「水、いるとき言えよ。ポンプ動かす」

大変有り難い。まあなんとか水は舞が回っている。

なにせ、Aさんの畑は、私の耕している面積の1.5、2.0倍くらいはあるだろうか。広すぎるので半分は休ませておられる。

夏でも秋でも、私は、隔日とか2日、3日空けて世話しても良いが、Aさんのところくらいになると、最低

の見回りだけでも手間がかかる。

この畑をお借りしてから、長男が結婚し、私のマンションの隣の部屋に住んでいる。女の子の孫が出来た。夫婦とも教員なので、2歳の今は私と妻が、保育園の送り迎へも出した。朝は8時半頃に妻が、夕方は4時過ぎに私が出かける。たまには朝ご飯を食べさせ、夕ご飯も食べさせるので、妻がいそいそとかかりつぱなしである。

次男坊は、卒業した大学から明石に帰らず、徳島県に住み着いた。やっぱり教員をしている。私が教員の人生だったので、「たぶん、私が生き生きして働いていたのだろうな」と勝手に想像して、父親として嬉しくはある。そこにも孫が生まれて、私には今4人の孫がいる。

長男の孫は、畑にはちよくちよく来る。ジャガイモ掘りや、タマネギとり、ミニトマトも持って帰る。次男のところにはこちらに来たときに、たまたま出来たものがあれば持って帰らせる。

畑をしだしてから月一度くらいの講演会をこなしていた。若い頃からの物書きのおかげで「自分史の書き方」とか「絵本の与え方」なんていう講演会をする。中学生相手に授業をしてきたので、話は慣れているが、成人相手は勝手が違う。高齢者が多いと、聞き手は人生の先輩だ。もと大学の先生、もと大企業の部長、もと新聞記者・エンジニアと専門家も多い。迂闊な話は出来ないし、面白くなければねてしまわれる。

題材としては「人権」のお話も仕事でかかわってきたので行う。もう合計すると100回ぐらいになる。だから「結構面白く話できているのだ」と一人悦に浸っている。しかし、内容が違っても同じ顔が何度も何うのでも、聞く方が飽きてきてマンネリ気味で、最近は講演回数が減ってきた。が、有り余る時間の中で畑仕事と丁度釣り合っていた。

62歳の時に、退職後しかなかった得度をした。一応僧侶になった。ところがすぐに、週一回ほどであった短大の非常勤講師から准教授になり、それどころではなくなった。僧侶は特段仕事があるわけではない、講演会も時間調整すれば伺える、しかし畑は放つておけない。1年間は、土日に帰る度に畑通いとなった。まあ大学の先生は比較的時間の都合がつきやすいので畑は荒れずに済んだ。

大学を退職して、通信制の佛教大学に入った。3回生編入である。学生証をいただき、訳も分からずに履修登録をしたら、7月と8月は、「おお！！ モーレッツ！！」になった。些か古い表現なのはお許し願いたい。

京都のホテルに泊まり込んで日がな一日勉強した。なにせ暗記できないし、覚える端から抜けていく。でも面白い。日本の仏教がこれからどうなるか、いまもの凄く興味がある。全く生まれかわるか、復興するか、滅亡するか、ちよつと考えをまとめてみたい。

人は、人生が安定すると、そのまま現状維持の道を進もうとする。波乱を好まない。逆に言うと現状に拘泥してしまう。頭が錆び付いて物事を客観的に見ようとしない、聞こうとしないから、折角の経験が生きてこない。さらに歳を取ると変化に対応できない、築き上げたものが崩壊したらもうたて直せないからますます保守的になる。ものの見方が偏狭になり、しかも頭はますます錆び付いて、それを認識できなくなる。

ところが私の場合はいつまでもおつちよこちよいで、青臭い。どうも自分で変化に飛び込んでいるようだ。それは良く言うと「若さ」と言うことで素晴らしいことのようにだが、実は飛び込んで経験・知識がその中身を見抜いてしまう。つまり悪いところが見えてしまうのである。すぐに「ケツを割る」ことになる。これも困ったことで、若さによる「見えない」「がむしゃら」「思い込み」の良い点を努力して作らねばならない。「見え

ない」「がむしやら」「思い込み」は悪い意味で使われるが、実は目標に向かつて猪突猛進するにはいい能力なのである。

「恋愛なんて、若いから出来るんだなあ」と脱線して思う。歳を取ると打算が働く。嫌な話だ。

まあ、この歳になると「好きなことをしていればいい」ので無理をすることもない

で、佛教のテキストに悪戦苦闘し、朝から晩までの講義にくたくたになり、ホテルで沈没し、サロンパスとアリナミンのお世話になる。それでも「好きなこと」なのだ。しかし、この状態で帰宅しても流石に畑には行けない。

妻が水やりと収穫に出かけてくれた。

秋になってそれも一段落した。まあ、卒業には3、4年以上はかかりそうである。

「目標70歳」

と小さな声で呟いてみる。

畑も、もう少し広くても手に合いそうだが、歳との兼ね合いも考えないといけない。もちろんAさんのように90歳まで出来たら素晴らしいが、私の身体がそれについていくかどうか分からない。それに、あと25年もすると、この辺りの農地は住宅地に変わっているかも知れない。大東建託かレオパレスかも知れない。

「ま、生きていない確率がグンと高いな」

と考える。元気ならば生きていたい気もするが、生には余りこだわらない性質らしい。それは、48歳の時、青天の霹靂であつた胃ガン手術をした。その生死を突きつけられた時期の自分の気持ちを考えて思う。

「ま、しゃあないか」である。

明石市の高年手帳を見、佛教大の学生証を見、それから自分の手を見る。鏡には丸坊主で、シミの浮き出た老人が写っている。

9月末、5時半はまだ少し暗い。ひと月前は明るかったのだが、彼岸を過ぎてこれからは日の出はドンドン遅くなる。

といつても6時前になると十二分に明るくなる。実際は4時半頃から目が覚めてウドウドとストレッチなどして、ゆつくり排便・洗顔する。水を一杯のみ、それから10リットルの水の入ったポリタンクと、2本のうがい兼手洗い用ペットボトルを持って、スリッパで玄関を出る。出たところの踊り場奥にある靴にはきかえる。これは畑用の靴で土のついたまま玄関に入るのを避けるためである。但し、階段は帰宅の度に掃き掃除をする。

(はて、これなら玄関を掃いた方が楽か……うん。ま、ええか……)

エレベータで一階に降りて、バイクに水を積む。ヘルメットを被ってエンジンをかける。半袖で少し寒い、まだ震えるほどではない。

6時になると、南に下りる道路突き当たりの赤の点滅信号が、普通の信号に切り替わる。6時まででは、停止して注意して進めだが、6時からは信号の指示通りに進む。

郵便局前の用水路で一旦停車して、水が流れているか確認する。流れていれば私の畑の方に水が行くように、用水路の中のブロックの位置を変える。奇数日は優先的に私の借りている方の畑に水を流すことが出来る。無論、ポンプアップされていなくて水のないときは諦める。それから再度バイクにまたがって山陽電車

の踏切を越えて畑に向かう。

今朝は隣のAさんは来られていない。少し残念で、また一方、挨拶するという心構えから解き放たれて、少しホツとする。

ポリタンクの水を置いて、長靴に履き替える。帽子を被る。腕には虫除けジェルを塗る。もう殆ど不必要だが、油断すると刺される場合もある。まあ10月になると完全に要らなくなるだろう。

豆が倒れないように挿してある支柱の先に、ビニール手袋とイボ付き軍手がある。これをはめる。素手で作業すると、爪の先が真つ黒になり、風呂に入ったくらいではなかなかとれなくなる。

「素手では、65歳のお肌にも悪いし」

自分で笑う。

そういえば、今朝はサニタリーで日焼け止めを顔に塗ってきた。

元々日焼けして真つ黒であるが、少しはましになるだろう。

「ま、余り日に焼けすぎるのも良くないしなあ」

歳をとると一旦出来たシミなどは元に戻らない。

用水路の溝に、水留めの土嚢を落とし込む。この土嚢も綿ではなくて、化繊で出来たものが販売されている。但し、外気や日光に晒されると、プラスチック同様脆い。

水が溜まるのを確認しながら、植えて芽が出だした大根を選別する。かたまつた部分の双葉を取って、別のところに移す。但し、根付くかどうかは自信がない。

ナスやピーマン、豆の土の表面をかき、水だまりを作る。葱やジャガイモの土も空気を入れてやる。油かす

と化成肥料を撒いて土を被せて水をやる。ここ3日ほど雨がなかったのでたつぷりと。

暑くない。真夏なら、6時から30分作業しただけで、まさに滝のような汗だが、微かに皮膚に粘り気を覚える程度である。

7時50分になると畑から見える山電の駅のサラリーマンも数が減り出す。ピークは7時過ぎからの30分間のようだ。

水桶の減った分だけ、土嚢でせき止められた用水の溝から、長いひしゃくで水をくみ入れる。ついでに、溝周りの長く伸びた雑草を刈り取る。

8時過ぎ、一段落したので、置いてある木の椅子に座る。帽子をとって頭を冷やす。ほんの一、二分の休憩。

この後は、少し葱などをとり、ポリタンクの水をバケツに移し、ペットボトルの水で手を洗い、うがいで、長靴を脱ぐだけだ。

ゆつくりと目を閉じる

もう羽虫も心配ない。蚊もない。

お日様と僅かな風が心地よい。

脇の裏が暖かい。道路を走る車の音が聞こえる。

ふと、胸に軽い衝撃が走った。

目を開けようとして、動かないのに気がついた。

頭の中で、誰かが囁いた。

「いきましようか」

と声がした。

「そうか、終わりなのか」と思った。9時になつても帰らないと妻が気にかかるだろう、と思った。「でも、10時にならないと様子は見に来ないかな」と妻の顔を思い出しながら動かないほほで微笑んだ。

「佛教の勉強とまとめと、小説も書きたいし…、妻と小旅行もしたいし…、ま、いいか」

ゆつくりと頭が垂れた。多分遠くから見ている人がいたら、椅子に腰掛けて眠っているように見えるに違いない。

「どこへゆくのかな？」

と誰かに尋ねた。余り悪い事をした覚えはないから、地獄ではないだろう。阿弥陀様が極楽へ連れて行つて下さるかもしれない。そこで修行をするそうで、それはチトしんどい。それに極楽の様子を聞いていると、どうも宝石だらけで硬質な世界という感じがする。妙なる音楽と素晴らしい香りに包まれたところだが、男女の別はなくなると言うから、ずっといると窮屈で退屈な感じがする。

「心配しなさんな」

また声がした。

目の前に真っ白い光があふれて、私はその中に吸い込まれていった。

暖かい光が、私の身体に降り注いでいた。

仙人掌

瓜生 八頼子

ちょうど十年前、俳句探訪の旅で岡山の津山城に行きました。天守跡には仙人掌が咲き乱れ、白い花の塊の中からは今にも仙人掌が現れそうでした。次の年、明石公園を散策している途中で仙人掌を見つけ、うれしかったことを覚えています。

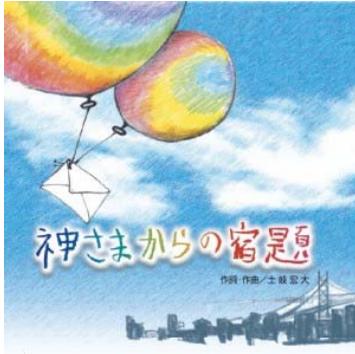
その次の年、どこからか種が飛んできたのでしよう。わが家の庭に初めて仙人掌が育ち、白い花を咲かせました。三年ほど愉しませてくれたのですが、春の新芽どきに黒い小さな虫が付き、やわらかな葉はきれいに食べられてしまいました。

そんなわけで、ここ数年は仙人掌の花を見ることができなかつたのですが、今年、新芽が出たときに葉をまいてみました。すると以前より虫が少なくなり、見事に花をつけてくれました。今、見ごろです。白く小さな花の塊は、雲のようにも煙のようにも見え、和ませてくれます。

平成23年9月の神戸新聞発言欄掲載！



## 筋肉が骨になる難病 (FOP)



◆ 筋肉の細胞が骨に変わる「進行性骨化性線維異形成症 (FOP)」という難病があります。

明石でも魚住中3年の山本育海君がFOPです。

◆ 2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆ 治療薬の研究費にあてる募金も行っています。ぜひ、ご協力下さい。

◆ 問い合わせはFOP明石事務局

(080・3775・2257)

◆ 絵本やCDの販売も行われています。詳しくは下記HPでご確認下さい。

◆ <http://www.fop-akashi.jp/>

あこがれのカラオケ教室

水田竜子

歌を歌うことが好きでいつか習いたいと思っていた。そんな時、友達と話をしているとカラオケ教室に通っているという、嬉しくてすぐに場所と時間を教えてもらい見学に行った。雰囲気は演歌が主流だったので、イメージしていたものと違い、地味だった。それに演歌だけに習っている人も皆60歳を過ぎていて、中には80歳を越えている人もいた。もう少し若い人のいるところの方がいいかなと頭をかすめた。おまけに、曲目も聞いたことのないものばかり。よく知られてる石川さゆりや、森昌子の曲なら聞き覚えでなんとか歌えるかなとも思ったが、多岐川舞子、服部浩子、水田竜子…の曲！？ 楽譜の読めない私に歌えるのかなと不安だった。ちよつと考えてきますと、いったん教室を後にした。

別の教室を見学に行つてもよかつたのだが、歌を習いたい気持ちは変わらない。それどころか、早く歌いたい気持ちがつのる。まあなんとかなるか、通うことに決めた。

毎週金曜日の午後1時から4時まで、結構長い。歌えないが一応マイクの前に立ち、声を出してみる。度胸だけはある。今考えるとどんな歌い方をしていたのだろう。恥ずかしい。先生が熱心に教えて下さっていたことだけは覚えている。そんな私も、毎週、毎週、先輩方の歌を聞いているとこんな風に歌うのかなど、耳が慣れてきた。1曲、3番までの歌詞を覚えると、自転車をこぎながら、時にはお台所に立つて、お風呂の中でも歌った。演歌を！！ 主人がいい迷惑。会社から帰つてくると大きな声でうなづける。「こは小料理屋か、のれんくぐつていっばいちようだいと言いたくなるぞ」と苦笑していた。後で聞くと音楽好きな主人だが、

演歌は好きではなかったのだ

私は変わらずマイペース、何にも分からず飛び込んで、歌えもしないのに楽しめて、金曜日が待ち遠しかった。それからというもの、お仲間とカラオケボックスで歌い、時には一人で練習にも行ったり、カラオケ喫茶をみつけては人前で歌って大いに楽しんだ。今なら、人にお聞かせできるような歌ではないことが分かるのに、その時は恥ずかしくもない。お隣に座った知らない人とも言葉を交わし、別の場所でお会いすると会釈をする。こんな出会いも悪くはないと思っていた。

そんなある日、歌が抜群に上手いマスターがいるカラオケ喫茶があると、噂を聞き友達と行った。

マスターは、お客さんに受けてみたらと言われて受けた段・級審査でいきなり7段を取った腕前で、のちに歌手になられた。演歌を歌うのだが、お腹の底から声が出て、情景が目には浮かんでくる自然な歌声だった。これが歌なんだと思った。

その人から、「終わりの部分そんな歌い方してたら先生に注意されへんか？ めりはりをつけずに歌っていたら、何か言われるやろ」と注意された。

「いえ、何も……」

「そんな素人みたいな先生に習ってたらあかんぞ。いい先生紹介したろか」

ちように歌い終えて帰る時だったので、そのまま店を出た。それから二度と行かなくなった。

あれから5年経ち、あのアドバイスは的確だったと思う。あの時の私には素人みたいな先生という言葉に、気持ちのひっかかりがあった。

しかし、教室では上手な人の歌を聞いて、自分なりにめりはりをどこでつけたらいいのかを考えるように

なった。終わりの部分も歌い方を変えた。

ただ楽しいだけで続いていたが、奥の深いことを知ると難しいと思うようになり、センスだと気づく。センスのある人は上達も早い。私にはそのセンスもないが、楽しめたらいいか趣味なんだから。お腹から声を出すのは健康にもいいしと割り切った。

登場人物の気持ちになつて、朗読するように歌うといいと教えてもらう。声だけが出るのだが、気持ちになるには年数がかかるだろう。実際教室で習っている人の多くは、10年を越えていた。人と比べるものではないと、マイペースで続けた。

3年、4年と過ぎていったある日、先生が怪我をされたので教室はしばらく休みになった。役をしていたので、お見舞いに行つたがお元気な様子に安心し、又教えて頂けると皆思っていた。そんな矢先、入院先で脳梗塞を起こされ、教室を閉じられた。思わぬ知らせに驚き、残念でならなかつた。新曲を教わると次の週末でに少しでも歌えるようになっていこうと、一生懸命に練習した日々。心の張りだつた。それからというもの、歌に身が入らなくなり、目標もなく、練習もろくにしない。楽しんで行つていたカラオケボックスも、カラオケ喫茶も足が遠のいた。

下手の横好きではあるが、歌いたい気持ちは持っていたので、友達で紹介で個人レッスンを受けることにした。先生が変わると、教え方も全く違うし頑張ってみようと思つている。先生は歌手で、多方面で活躍されている人、声が魅力的で、当たり前だが歌が抜群に上手い。ポップス、演歌、シャンソン…何でもオツケー。この前まで弘田三枝子の人形の家を教わつていた、古い歌だが。我流で歌つていた時と変わった、感情の入れ方、声を張るところが、どこなのかが分かつてきた。声がよく出ると誉めて頂く。今は演歌に挑戦。これから、

いろいろな歌を歌っていききたいと思っている。そして今よりも少しでも上手くなれるといいな。





### アクトス写真館

神戸市の夜景です。

真ん中やや左よりは『ポートタワー』です。鼓の形をしたユニークな塔ですが、高層ビルが出来て影が薄くなりました。

右の光の集まりはハーバーランドです。

ここも、新たな開発が始まろうとしています。

「山、海へ行く」と背後の須磨、高倉山の土砂をベルトコンベアで海に運び、土砂運搬船でポートアイランドが出来ました。その後、六甲アイランドや神戸空港が生まれています。

## ◆ショートショート

◆明花さんから提案頂いたコーナーです。俳句や短歌・川柳・詩などはコーナーに入れませんが、コーナー対象であることを明記してお送り下さい。判断についてはこちらに任せ下さい。

### 鏡と写真

友人がぶつきらぼうに写真をわたしの前に置いた。

「はい。これ」

「何、これ。この広い額。目元の皺。口元の弛み。誰、これ」

「あんた」

「うそ！人違いや」

「あ・ん・た」友人は容赦なく言い放った。

毎朝、洗顔の時、鏡で自分の顔を眺めている。額はそれなりだし、目元の皺も気にならない。口元も締まっていると思っている。なのに、写真はそう写っていない。これは俺ではない、と思ってみるが、間違いなく俺なのだ。

高阪博一

何故そう思うのか。ない知恵を絞って考えてみた。そうだ、と思い当たった。鏡は、若くあれ！というわたしの願いを、映し出しているのだ。つまり、心を映し出しているのだ。一方、写真はその瞬間のわたしの肉体そのものを、映し出しているのだ。六十五歳は五十歳に写るはずがない。

決めた。今度から写真を撮る時は、帽子に、サングラス、マスクをしよう。あいつに「あんた、誰？」と言われようと。



「兵庫県旅券事務所」HPより合成

了

おじぞうさま

大西亥一郎

おじぞうさまは、じつとお母さんの顔を見ていました。

首にかけられたよだれかけは、きれいに洗濯されたものです。ふつう、おじぞうさまに自分の子どもが分かるようにと、子どものおいのついたよだれかけをするのですが、このお母さんは、「それはおじぞうさまに失礼だ」と考えたでしょう。

おじぞうさまは、にこにこしていました。よだれかけなんてなくつても、この世の中の幼子たちのみならず、総ての人のことは分かっています。また、おじぞうさまの化身は、ガンジス川の砂の数どころではないのです。子どもの数がいくら多くても困ることはありません。でも、お母さんたちが「自分の子どもを」と望むならそれはそれでいいとお考ええし

た。

お母さんの子どものごうたくんは、四歳で息を引き取りました。原因不明の高熱が続いて、亡くなったのです。親より先に死んだ子は、親を嘆き悲しませ、また良い行いも出来ぬままなのだと言われています。

おじぞうさまはちよつと考えられてから、たちどころに賽の河原に飛ばれました。

この世とあの世の境にある三途の川は、地球上のどの川よりも大きくて、その川の手前にある賽の河原も、無限に続くような広さがありました。

河原では無数の子どもたちが、石の塔を積んでいます。しかし積み上がる前に、赤黒い鬼が、その巨大な鉄棒でそれを崩しています。

「ごうたくん」

おじぞうさまは微笑みながら、四歳になる男の子の前に立ちました。

こうたと呼ばれた子どもは、泣き腫れた臉をあげました。

どんよりと曇る賽の河原の空を背景に、透き通るように青く輝きながら、おじぞうさまが見下ろしておられます。鬼たちは三メートルもある身体を縮こませて、地面にひれ伏しています。

おじぞうさまの身の丈は、そこでは十メートルもありそうです。額の白毫びやくごうから、春の色をした光線がこうたくんを照らし出しました。

「あ、かいぶつ！」

こうたくんの口から、言葉が矢のように飛び出しました。

ひれ伏した鬼たちは、ぎよつとして思わず顔を上げ、中には驚いてひつくりかえり、口から泡を吹いている者もいます。

「かいぶつ！」

こうたくんはまた叫びました。

すると、おじぞうさまの出現に驚いていた、周り

の子どもたちも、「か・い・ぶ・つ……」と言い始めました。

「かいぶつ……、かいぶつ、かいぶつ！」

おじぞうさまに対する声がドンドン広がります。

おじぞうさまはちよつとぎよつとして、白毫びやくごうからの光が一瞬止まりました。

（おやおや、弱つたな）と思われました。

幼くして亡くなれば、確かに親を悲しませ、また善業を積む時間もないでしょう。でもそれが子どもたちの責任であるはずはありません。

「こ、こらっ！」

流石に鬼たちは慌てて立ち上がりました。

「やめろ」

「やめなさい、おじぞうさまだぞ」

でもなかなか声はおさまりません。

こうたくんはおじぞうさまを知りません。どこかで見かけたことはあつたにしても、それが子どもたちを救う仏様だとは知らないのです。他の子ども

たちも同じです。大都會で生まれた子どもたちの中には、おじぞうさまを見たこともない人もいます。「地藏盆」という行事でお菓子をもらつても、それがどういふことなのか知らない子どもたちが大部分です。

「や、やめなさい」

鬼たちは必死で叫びます。

鬼たちだつて好きで賽の河原の石積みの邪魔をしているわけではありません。昔からそう決まつているのです。だから鬼たちもこの仕事は嫌なのです。

石積みの塔を崩すときだつてほんの少しにしていますし、七度崩せばもう邪魔をしないようにしています。完全にできあがつていなくつたつて、できあがつたことにするのです。ここでは子どもたちの懸命の努力も必要です。それとともに石積みの塔のいいのができあがるのも、子どもたちが三途の川を渡つて、新しい世界に転生できるのも、その親たち縁者たちの祈りの力にもよるのです。子どもたちの幸せを

願う心です。でもそれが子どもたちもいます。そのために人間社会では「地藏盆」があり、また、おじぞうさまが子どもたちを救うのです。

子どもたちの声はなかなかおさまりません。なるほど大仏様以外に、こんなに大きな仏様は見たことがないのです。

(やめなさい……)

おじぞうさまの声が白毫びやくごうの光の中に溶け込み、賽の河原全体を包み込むように輝きました。

こうたくんの心の中にお母さんの顔が浮かびました。

子どもたち全員の心の中に、優しいお母さんの顔が浮かびました。例えお母さんに酷いことをされた子どもたちにも、優しい優しいお母さんの姿が浮かびました。

総ての人の心の中にある仏性が響き合いました。なんと、ごつい身体の鬼たちの心の中にも、お日様色の暖かい風が吹き込みました。

同時に、河原の無数の石積みが、周りの石を集めて組み上がっていきます。つてんまで組み上がった石積みは、ほのかに黄金色に輝いています。

そして三途の川の空は、払うように晴れ渡り、川面に幾筋もの虹色の橋が架かりました。

子どもたちは夢から覚めたように、虹色の橋を渡り始めます。その端は遙か彼方の対岸の、紫雲の中に溶け込んでいました。

こうたくんは、歩き出しました。そして立ち止まるとおじぞうさまを振り仰いで、小さな声で言いました。

「かいぶつくん、ありがとう」

おじぞうさまは、また、ちよつとギョツとして、それからゆつくり微笑まれました。

おじぞうさまの左手の如意宝珠にょいほうじゆから、銀色の光があふれ出し、賽の河原を包み込みます。

お母さんは、幼稚園の入口にある目の前の小さなおじぞうさまのお顔を見て、ほつと息を吐き、それから深く頭を垂れました。石のおじぞうさまが確かに微笑まれて、「善哉よきかな、善哉よきかな」と言われたのが聞こえたからです。

『『半どん』の24年度次号に掲載予定』



なにしている

まいにちまいにち 泳いでいます

「よくまあ 続く」と言われます

でもでも 止まるわけにはまいりません

時々、休みたいとも思いますが

休むと息が止まります

「寝ないで平気？」と聞かれますが

体の半分ずつですが ちゃんと眠っております

海の中では 仲間と一緒に

でもでも 油断は出来ません

仲間といえども お腹が空いたら

危ないことにもなります

今日も 泳いで泳いで 生きてます

「カツオ」



◆近隣地域で、浄土宗のお寺  
を、お探しの方のお役に立ちたい  
と思います。

浄土宗 永金山 常纂寺  
えいこんざん じょうざん じ

〒651-2133 神戸市西区枝吉4-40

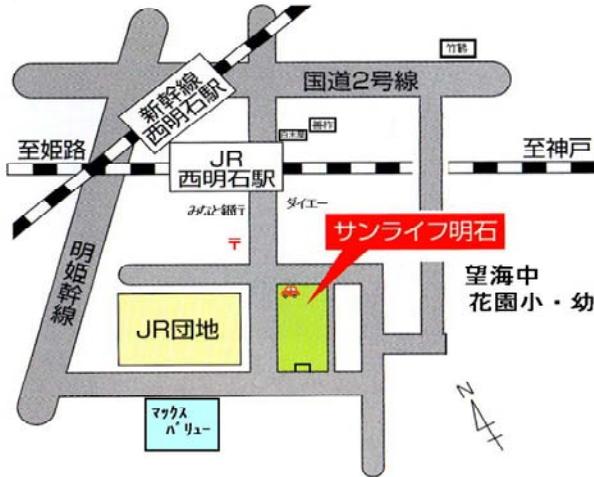
■ TEL : 078-928-6622

■ FAX : 078-928-6858

◆メール hayato13@yc4.so-net.ne.jp

住職 佐藤 俊明

副住職 佐藤 明宏



◆ 中高年齢労働者福祉センター  
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合はご注意ください。●手帖などにお控え下さい。●出欠のご連絡は不要です。

編集室から

①次号(第17号)の原稿締め切りは12月末必着です。

②前ページにありますように、**例会場は、サンライフ明石です。**

変更・中止等の場合はHP掲示板、メール等でご連絡いたします。

**十一月例会は17日(土)です。**

**一月例会は19(土)です。ご予約下さい。**

③HPに、16号までを、PDFフ

ァイルで掲載しました。

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきません。)

④読書の秋です。『秋の夜長』といいますが、ますますこれから夜の時間が長くなります。冷暖房はまだ不要。いろいろと取り組

める時間となります。現職の学生、サラリーマンの方はお忙しいかも知れませんが、また主婦の方、子育て真っ最中の方も大変でしょう。ただ将来のために、自分の人生のために読書と、書き続けることをお勧めします。私の苦しい反省からです。

⑤高阪さんの作品に、「編集部

註」をつけました。漢字にふりかなも少し振りました。私の目線で、「果て？」というもの「何とか読めるが確かかな？」というものの「意味掴めないなあ、あかんなあ」というものです。そこそこ読めるという自信はあるのですが、「とんちんかん」でもありません。これからもこの手の作業をしますので、うるさい点はご容赦下さい。

⑥その高阪さんからのご提案いただきましたが、次回例会は第40回となります。終了後、懇親会を持ちますので、お時間に余裕ある方は参加ご予約下さい。⑦時代の転換点のようです。選択を誤ると我が国は、暗い世になるかもしれません。

「亥一郎」

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メール  
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可  
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614  
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会

奇数月第3土曜日

※午後 1時半、

◆場所

中高年齢労働者福祉センター

(サンライフ明石)

〒673-0041

明石市西明石南町

3丁目1-21

電話 078-923-0770

※JR西明石駅南、徒歩3分

(新幹線西明石駅南徒歩5分)

※明石市立望海中学校・花園

小学校の西、徒歩2分

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

アクトス 第16号

平成二十四年十一月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円